

E-2 江戸時代の調度 —調度の意味について—  
山梨大教育 浅見雅子

目的 平安時代の調度の意味に引きつづき、道具が一般庶民の生活の中に広く浸透し、定着した時代である江戸時代に調度と呼ばれたものは何かを文献的に定義することを目的としたものである。平安時代には「何々具」と呼ばれる道具類は、分類の上では、すべて調度であったが、狭義に解釋すれば、主として住居内で日常使用されるか、或いは飾装のための家具と区別していた。特に、それらが、江戸時代に至って、語意、或いは、分類の上から如何なる変化をきたしたかを考察する。

方法 江戸時代の百科全書、辞書類から、各項の分類により、調度にある「語」を求め、平安時代と比較し、その意味を検討し、宗教、労働、生産、治安、風俗習慣、生活の各具にわけて、明治、昭和時代との関連に於いて変化をとらえてみた。

結論 平安時代に調度と呼ばれた道具類の多くは、江戸時代には、器用とか器用となり、「室礼」と云う部屋の補設を目的とした静的な道具から「使う」という機能を主とした動的道具としてとらえられるようになっていった。しかし、調度は、江戸時代にも大名調度として残り、絵師、工匠の手により工芸品として作られ、美術館に保存され、器用、器用として使われた一部の民芸館に残っているのと対称をなしている。各具の変移は、平安時代に三十三種類あったものが、江戸時代には十五種類と約半分になり整理されている。これは、専ら職の出現により、職業的な道具は除かれ、生活具が主になって来たためであり、明治、昭和時代へと受けついで来ている。